

## メトロポリタン史学会 第四回総会・大会のお知らせ

来る4月19日(土)に、下記の要領でメトロポリタン史学会の第四回総会・大会を開催します。大会では「民衆運動と宗教」をテーマにシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。なお、今回の会場は都合により本部棟1階奥の大会議室となりました。従来とは異なりますので、お間違いないようお願いいたします。

- 日時 2008年4月19日(土)午前10時30分～午後5時30分  
会場 首都大学東京(東京都立大学)本部棟1階・大会議室(本会報6頁地図参照)  
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)
- 日程 総会：午前10時30分～12時  
大会：午後1時～5時30分  
シンポジウム「民衆運動と宗教」  
〔報告者〕  
小澤 浩氏(元富山大学)  
「幕末民衆宗教の歴史的意義 その再検討に向けて」  
趙 景達氏(千葉大学)  
「植民地期朝鮮におけるキリスト教系終末運動の展開と民衆」  
大塚和夫氏(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語・文化研究所)  
「宗教/政治運動と民衆/大衆—中東ムスリム社会の事例を中心に」  
増谷英樹氏(獨協大学)  
「1848年革命とユダヤ教徒」  
懇親会：午後6時～(会費4,000円)

### 〔シンポジウムの趣旨〕

歴史上において、人々が集団的に行動する時、それが暴力を伴うような激しいものであれ、もっと「穏健な」ものであれ、いずれにしろ何らかの共有された意識 集合的意識 の存在が前提となっていたであろう。そのような集合的意識は、歴史学においてしばしば、宗教と結びつくものと考えられてきた。しかし、特に前近代社会においては、宗教が宗教として「自立」し、他の諸意識形態から明確に区別されるということはほとんどなかったといっても過

言ではないであろう。そのような前近代における宗教意識と民衆運動とのかかわりは、宗教が自覚的に捉えられるようになる近代社会における両者の関係とはかなり異なっていたと考えねばならない。したがって、前近代から近代にかけての時代を対象として「民衆運動と宗教」を問題とすることは、一方では、民衆の運動にとって宗教のもつ意味、機能の変化を歴史的に検証することになるし、他方では、宗教という言葉で語られることの意味内容の変化を歴史的に追及することになるであろう。

このような観点から、本シンポジウムでは、18世紀から20世紀を主たる対象として、ヨーロッパ・キリスト教世界、中東イスラーム世界、東アジア世界における「民衆運動と宗教」の問題について、各報告者に報告していただき、そのうえで、総合的な討論したいと考えている。

## メトロポリタン史学会第三回秋季シンポジウム報告

第3回秋のシンポジウム「地域世界論の新地平」が、2007年11月17日(土)に首都大学東京(東京都立大学)91年館多目的ホールで行われました。出席者は約30名でした。報告者および報告内容は以下のとおりです。

千葉正史氏(明治学院大学非常勤講師)

「天朝『大清国』から国民国家『大清帝国』へ

- 清末中国における政治体制再編と『帝国』概念の受容 - 」

金子修一氏(國學院大學)

「古代東アジア世界論とその課題」

北島万次氏(元共立女子大学)

「秀吉の朝鮮侵略における鼻切りと虚構の供養」

藤田 進氏(東京外国語大学)

「故郷喪失者が問う地域 - パレスチナ難民の現場から考える - 」

栗田禎子氏(千葉大学)

「『中東』論の現在 - 『大中東構想』と『イスラーム世界』論のはざままで - 」

平田雅博氏(青山学院大学)

「地域・国民国家・帝国(ウェールズ・イギリス・イギリス帝国)

- 1847年ウェールズ教育状態報告書を素材に - 」

シンポジウムの内容は今秋、桜井書店から『メトロポリタン史学叢書3』として刊行の予定です。ご期待ください。

2007年10月7日(日)に、第2回歴史探訪「戦争の記憶をたずねて 東京大空襲と下町」が実施されました。江東区にある「東京大空襲・戦災資料センター」と周辺の慰霊碑等をたずねる企画でした。参加者は16名でしたが、東京下町に残る戦争の傷跡にふれる一日となりました。参加者の柄澤さんに参加記を寄せていただきましたので、以下に掲載します。(事務局)

## 【第二回歴史探訪参加記】

柄澤 守

10月7日、東京大空襲の痕跡をたどる見学会は好天に恵まれました。私自身は、2年前の後樂園周辺の見学会以来2度目の参加となります。参加者は十数名と思ったより少なかったのですが、さすがに都立大出身者、東京大空襲と何らかの関わりをもつ体験をされた方が多く集まりました。個人的には学生時代お世話になった佐々木隆爾先生に久しぶりにお会いし、ご挨拶できたことが大きな収穫でした。

戦災資料センターでは本校の卒業生でもある山辺先生から講演をいただき、展示資料を見学しました。東京全域の被災地図を眺めると、壊滅的打撃を受けた下町だけでなく23区内はほとんど絨毯をしいたように焼夷弾が落とされていることがわかります。私の母の実家がある大田区が多摩川周辺ですら被弾地点が点在し、たまたま落ちた爆弾が不発で母の家は燃え残り、疎開地から帰ると知らない人が住んでいたという、昔聞かされた話がリアルに感じられました。

その後徒歩で、当時遺体が集められた公園などに作られた慰霊の仏像や碑を見学しました。すさまじい殺戮を目の当たりにし、やっとのことで生き延びた人たちにできるのは、祈ることだけだったのです。途中何度か運河を渡りました。縦横に伸びたこの運河が人々の退路を断ち、被害を拡大したのです。慰霊の地蔵尊が川沿いに集中しているのは、人々が川岸に追いつめられ、極寒の水面に飛び込まざるを得なかった事実を示しています。錦糸町駅付近まで2時間ほど歩きましたが、それほど疲労を感じませんでした。道路にアップダウンがまったくないからです。もともと洲や湿地だったこの地には高台や森がなく、そうした延焼を食い止める場所がなかったことも被害を一層大きくしたはずです。果たしてアメリカ軍はこういった条件をどこまでわかっていて爆撃を実行したのでしょうか。

私は今いわゆる『教育困難校』と呼ばれる高校で社会科を教えています。3年生になると退学や転学で生徒数が半分になる現場で、「先生ってただの下ネタ好きのオヤジでしょう」と悪態をつかれながら子どもらと付きあっています。どの程度一般化できるかわかりませんが、学校にいと「格差社会」の縮図が見えます。授業料未納、家庭崩壊、少年犯罪、居住地区の所得格差。生徒たちが語る生活体験は「不幸のデパート」です。そうした「下々の世界」を離れアカデミックな雰囲気を出すために見学会に参加したのですが、町を歩くうちに、下々の世界にこそ真実があるという思いが沸いてきました。権力にとっての戦争と民衆にとっての戦争が、同じものであるはずがありません。生徒たちは憲法改(正)に敏感です。自分たちが戦場に放り出された時、政府が助けてくれるかどうかを知っているからです。

## 【歴史随想】 私の古代史研究

川口 勝康（首都大学東京・都立大学、日本古代史）

当初はよく出席していた談話会の行事に、最近是不義理を重ねております。その不義理とともに馬齢を重ねるばかりで還暦などという事態に至ってしまい、昨年の六月にかつての院生有志の人たちに祝っていただきました。そんなこともあり、総括といえは大袈裟になりますが、自分のこし方をふり返ってみる意味でも、今年の人文学報に「天皇の成立について」という論文を書きました。私は日本古代史の指標としての君主号の変化を考えてきた者ですが、04年・05年の人文学報では倭王と治天下・大王の成立を扱っており、今回の「天皇の成立について」は、私の構想してきた「王号三転考」の完結篇といえるものです（大学も三転しましたが）。その意図するところは天皇成立の前提としての天子の位置と、その日本の意味を確定することです。そのことを論理的に、歴史的に、古事記の文脈的に、それぞれ検証したつもりです。の論理的とは、唐の儀制令の「皇帝・天子」が日本令では「天子・天皇・皇帝」となるのは何故かをめぐる日唐令文比較であり、の歴史的というのは、『隋書』のアメタラシヒコと（日出処）天子がスメラミコトと天皇号の成立に先行することの意味を、東アジア世界における倭王権の位置という視点と同時代史料を再構成する方法で提示したものです。その論理的・歴史的な「天子 天皇」の成立論が、古事記の文脈においては、天神の御子（天子の日本の意味）初代天皇の神武となり、古事記における「天皇の成立」は「帝紀の成立」としても確認されるという結論です（詳細は人文学報を見ていただければ幸いです）。

息の続かない私には、やや長いものとなったのは、論理・歴史・古事記の文脈の各内容をまとめて提示したかったからです。それにはかつての英雄時代論の背景があります。私が進路を変更して歴史学の世界に踏み込んだ契機となったのは石母田正氏の論文「古代貴族の英雄時代」です。この石母田論文の発表された『論集史学』を探しまわった時期があり、入手した一本を太田秀通先生に差し上げたことも、今は遠い思い出話になります。石母田氏の英雄時代論は記紀から散文的英雄と浪漫的英雄の類型を抽出・設定して、そのかなたに叙事詩的英雄（＝英雄時代）を想定するものでした。その散文的英雄には津田左右吉の散文的な記紀批判が、また浪漫的英雄には高木市之助の古事記歌謡論が踏まえられたもので、それをヘーゲル『美学講義』とマルクスにつなげたものでした。そこから出発した私の古代史研究も中心にマルクス主義をすえ、散文的作業として史料批判（同時代史料の重視）を、また浪漫的作業として「記紀万葉の世界」を位置づけるものでしたが、その要となる叙事詩的作業（「実践の哲学」としてのマルクス主義）が、その実践でこけてしまったわけで、私は「日本マルクス主義古代史学研究史序説」（何とも大時代的な題名ですが）の戦後編が書けなくなりました。かつて古在由重氏は「政治家に転向はありえても理論家に転向はありえない」と宣しました。その理論家を気取るつもりはありませんが、ラスト・マルクシストの意地だけは通そうとっていて、結果的には中空の年月を重ねてしまいました。せめてもの意地で「天皇の成立」についての散文的な史料批判に、やや英雄時代論に対する浪漫的な（甘いということですが）自分の思いを、あえて重ねて今回の人文学報の論文を書き上げた次第です。

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

## 『メトロポリタン史学』( The Metropolitan Shigaku ) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回 12 月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年 8 月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。  
論文( 図表を含み、24,000 字以内; 英文の場合は、8,000 語以内 )  
研究ノート・史料紹介( 同 12,000 字以内; 英文の場合は 4,000 語以内 )  
学界動向( 8,000 字以内; 英文の場合は 2,700 語以内 )  
時評・提言( 4,000 字以内 )
- (5) 論文、研究ノート( 縦書き、横書きいずれも可 ) には、欧文で要旨( 300 語以内 ) を添付する( 原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内 )。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿( 表、図表を含む ) 3 部、フロッピーディスク及び別記送り状\* ( 1 部 ) を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り 50 部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒 192-0397 八王子市南大沢 1 - 1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース( 歴史・考古学分野 ) 河原 研究室 気付

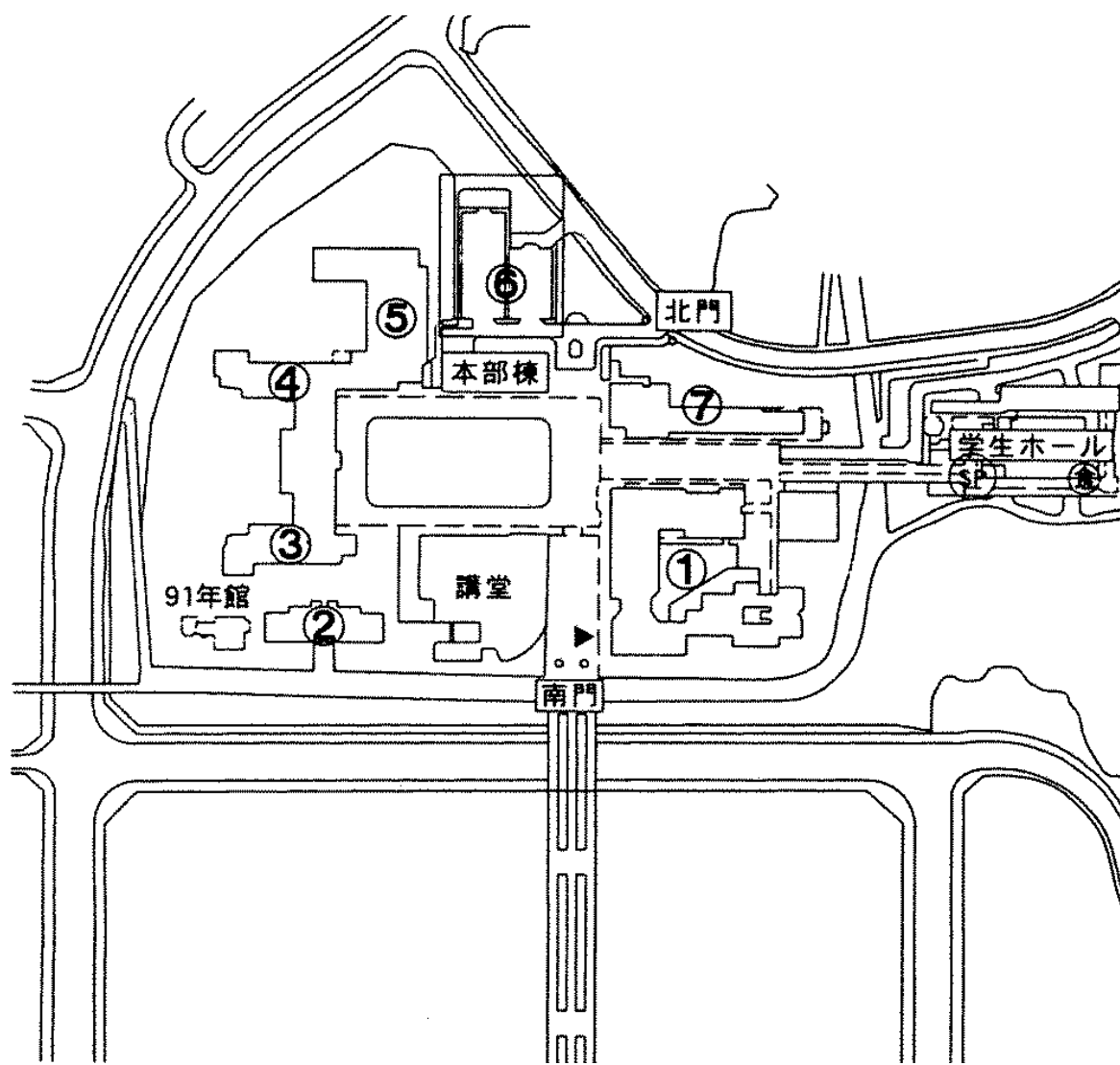
『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119 ( 河原研究室 ) Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp ( 河原温研究室内 )

SNC47077@nifty.com ( 河原温 )

\* 送り状は学会ホームページ( <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/> ) からダウンロードしたものをコピーしてご使用下さい。



南大沢駅

### 【事務局からのお願い】

年度末になりました。恒例の会計決算の作業中ですが、今年も会費未納が多く、頭を悩ませています。一人でも多くの会員が会費を年度内にお支払い下さるようお願いいたします。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。一般 5,000 円、学生・院生 3,000 円です。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒 192-0397

東京都八王子市南大沢 1 - 1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

： 0426-77-2110（木村誠研究室）

E-mail： mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ： <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替： 00100-0-537287